

Title	戦後日本における再軍備論の理念とその起源 : 「新外交」論者芦田均の戦前・戦中・戦後
Author(s)	矢嶋, 光
Citation	
Issue Date	
Text Version	none
URL	http://hdl.handle.net/11094/34011
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

論文内容の要旨

氏名 (矢 嶋 光)

論文題名

戦後日本における再軍備論の理念とその起源
—「新外交」論者芦田均の戦前・戦中・戦後—

論文内容の要旨

本論文は、戦後日本において最初に本格的な再軍備論を主張した芦田均の政治的足跡の全体像を検討することで、彼の再軍備論の理念とその起源を考察したものである。

序章では、従来の戦後日本外交史研究が吉田茂の外交構想と政治指導を主要な論点として展開されてきた一方で、吉田の軽武装論を批判した芦田の再軍備論が十分に研究されてこなかったことを指摘した。また、芦田の再軍備論を分析した数少ない先行研究も国際政治学における理想主義と現実主義という二項対立の図式を用いたものに過ぎず、その結果として提示されたリアリズム外交論者としての芦田像は実証的な分析に基づく評価とはいえないことを批判した。その上で、戦前から戦後にわたる彼の政治的足跡を辿ることでその再軍備論の根底にある理念的基礎を再検討する必要があるとして問題設定をおこなった。

第一章では、外交官時代の芦田が外交理念を形成する過程を戦間期「新外交」の受容という視点から分析し、特に国際連盟に対する彼の評価を中心に検討した。その結果、彼が勢力均衡方式を否定的に捉えるようになったこと、戦争違法化の原則と集団安全保障の理念を中核とする国際連盟を尊重する普遍主義的国際政治観を形成したこと、を明らかにした。

つづいて、第二章では満洲事変を契機として政党政治家へと転身した後の芦田の外交論を検討した。なかでも国際連盟が崩壊していく一九三〇年代の国際政治の現実に対する芦田の国際情勢分析に注目し、国際連盟の崩壊という現実によって集団安全保障概念に対する彼の理解が改められていったこと、それにともなって普遍主義的国際政治観にも変容がもたらされたこと、を論じた。すなわち、本来的には軍縮を推進するために規定された集団安全保障が実際に適用するために十分な軍事力の裏付けを必要とすること、暴力によって国際秩序を破壊しようとする勢力を前にして、理念的には普遍的であるはずの連盟が敵対勢力に対抗するための同盟と同様の機能を果たすことになること、をそれぞれ理解するようになったことを指摘した。

これらを受けて、第三章では戦後の芦田が積極的再軍備論へと至る過程を跡づけた。その際、戦前・戦中を経て形成された芦田の普遍主義的国際政治観から導かれる国際情勢分析、なかでも冷戦に対する見方について検討し、それとの関連から再軍備論を分析した。また、軽武装論や積極的再軍備路線内の対立にも検討を加え、芦田の再軍備論が持つ政策志向について論じた。その結果、芦田が冷戦に対して中立主義をとることは傍観を意味するに過ぎず平和維持にはつながらないこと、平和維持のためにも日本はアメリカをはじめとする自由主義陣営の側に立つべきであり、同時に自由主義陣営に貢献するために日本の再軍備が必要であると説いていたこと、を明らかにした。また、このような中立主義に対する考え方は集団安全保障の理念に影響を受けたものであったこと、そして再軍備の必要性を説く外交論も戦中期に変容を遂げた集団安全保障概念に対する芦田の理解から導かれたものであったこと、を指摘した。さらに、こうした芦田の再軍備論は、吉田の軽武装論はもちろん自主防衛論者たちの再軍備論とも一線を画すものであったことを論じた。

以上の点を踏まえて、終章では、戦後の芦田が軍事力を重視していたからといって勢力均衡を重んじるリアリズム外交論者として位置づけられる訳ではないこと、むしろ芦田の再軍備論は戦争違法化や集団安全保障といった戦間期「新外交」に代表される理想主義的な側面に強い影響を受けて唱えられてものであったことを指摘し、再軍備論は戦間期「新外交」論者が冷戦に対して出した一つの答えであったと結論づけた。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (矢 嶋 光)			
	(職)		氏 名
論文審査担当者	主 査	教授	瀧口 剛
	副 査	教授	坂元 一哉
	副 査	准教授	高橋 慶吉

論文審査の結果の要旨

本博士論文「戦後日本における再軍備論の理念とその起源 —「新外交」論者芦田均の戦前・戦中・戦後—」は、戦後日本において最初に本格的な再軍備論を主張した芦田均の政治的足跡を検討し、その理念と起源について論じたものである。戦間期に青年外交官として活躍した後に政党政治家へと転身し、戦後は首相をつとめ、晩年には再軍備論を主張するようになる芦田の政治的軌跡を、本稿は跡付けている。とくにその国際秩序観を「普遍主義的国際政治観」であるとして、起源を国際連盟と同時期の「新外交」にもとめて分析を行っている。

本論文は序章、第1～3章、終章から構成されている。

序章においては、従来の研究を検討し、著者の問題意識を明らかにしている。筆者は、従来の戦後日本外交史研究が吉田茂の外交構想と政治指導を主要な論点として展開されてきた一方で、吉田の軽武装論を批判した芦田の再軍備論が十分に研究されてこなかったことを指摘し、彼の再軍備論を分析した数少ない先行研究も国際政治学における理想主義と現実主義という二項対立の図式を用いたものに過ぎず、その結果として提示されたりアリズム外交論者としての芦田像は実証的な分析に基づく評価とはいえないと批判している。その上で、戦前から戦後にわたる彼の政治的足跡を辿ることでその再軍備論の根底にある理念的基礎を再検討する必要があるとする。

第1章では、芦田の自己形成とその時代状況を論じた後、外交官時代の芦田が戦間期「新外交」理念を受容する過程を、特に国際連盟に対する彼の評価を中心に検討している。その結果、彼が勢力均衡方式を否定的に捉えるようになったこと、戦争違法化の原則と集団安全保障の理念を中核とする国際連盟を尊重する普遍主義的国際政治観を形成したこと、を明らかにしている。

第2章では満洲事変を契機として政党政治家へと転身した後の芦田の外交論を検討している。満洲事変後の「極東ロカルノ」構想、外務省との協働による軍部抑制の試み、「東亜新秩序」論批判を行う芦田の思想が、普遍主義の理念と関係していることを明らかにしている。他方で筆者は芦田による一九三〇年代の国際情勢分析にも注目し、国際連盟の崩壊という現実によって、彼の集団安全保障概念、普遍主義的国際政治観にも変容がもたらされたと論じている。すなわち、集団安全保障が実際に適用するために十分な軍事力の裏付けを必要とすること、暴力によって国際秩序を破壊しようとする勢力を前にして、理念的には普遍的であるはずの連盟が敵対勢力に対抗するための同盟と同様の機能を果たすことになることを理解するようになったと筆者は論じている。また彼の対ソ協調論が反ソ論に変容する過程にも着目している。

第3章では戦後の芦田が積極的再軍備論へと至る過程を分析している。戦時中鳩山一郎らとともに翼賛議会において逼塞を強いられた芦田は、戦後脚光を浴びて中道政権の首相となり、疑獄事件による退任後は再軍備論者となる。筆者は、戦前・戦中を経て形成された芦田の普遍主義的国際政治観から導かれる国際情勢分析、なかでも冷戦に対する見方について検討し、それとの関連から彼の再軍備論を分析している。同時に、「超党派外交」から保守合同に至る政党政治家としての芦田の活動を彼の外交論との関係において跡づけている。また、著者は吉田の軽武装論や積極的再軍備路線内の対立にも検討を加え、芦田の再軍備論が持つ政策志向について論じている。芦田が永世中立不可能論を唱え、平和維持のためにも日本はアメリカをはじめとする自由主義陣営の側に立つべきであり、同時に自由主義陣営に貢献するために日本の再軍備が必要であると説いていたこと、を筆者は明らかにしている。また、このような中立主義に対する考え方は集団安全保障の理念に影響を受けたものであったこと、そして再軍備の必要性を説く外交

論も戦中期に変容を遂げた集団安全保障概念に対する芦田の理解から導かれたものであったと論じている。さらに、こうした芦田の再軍備論は、吉田の軽武装論はもちろん自主防衛論者たちの再軍備論とも一線を画すものであったと論じた。

以上の点を踏まえて、終章では、芦田は勢力均衡を重んじるリアリズム外交論者として位置づけられる訳ではなく、むしろ彼の再軍備論は戦争違法化や集団安全保障といった戦間期「新外交」に代表される理想主義に強い影響を受けて唱えられたものであったことを指摘し、再軍備論は戦間期「新外交」論者が冷戦に対して出した一つの答えであったと結論づけている。

本論文は、戦後外交史研究において吉田などと比べて関心の薄かった芦田研究に対する貴重な貢献であり、戦前・戦後の日本政治外交史へ裨益するところが大きいと評価できる。その特徴と貢献は次の3点にわたる。第1は、芦田均のみならず戦後外交史への新しい視角の提示である。従来リアリストと位置づけられてきた芦田を「普遍主義的国際政治観」の観点から分析したことにより、芦田のみならず戦後外交史に新しい分析視角を導入した、と評価できる。第2は戦前の外交官時代までさかのぼって戦後外交の起源を位置づけていることである。国際連盟の創設期に至る「新外交」の観点により、戦前・戦後の関係に関する新しい観点をもたらした。第3に豊富な史料調査に基づいて研究なされている点である。特に筆者は『芦田均日記 一九〇五 - 一九四五』の編纂過程に関与し、芦田の出身地である福知山の現地調査を行って、一次史料に精通し、これに基づいて本研究を行った。本研究は最新の史料状況に基づいてなされている。

以上のことから、本論文は十分な学術的価値を有するものであり、博士の学位を付与するに値すると判断するものである。